

2004'全国中学生ソフトテニス選手権観戦記

平成16年8月27日

『史穂里'パパ』

福島西ICのゲートを通過してすぐアクセルを一杯に開けると凄まじいエギゾーストノートを轟かせて、愛車BMWはあっという間に170kmまで加速し朝靄を切裂いた…。
8月21日午前8時JST。東北縦貫道追い越し車線を疾駆するブラックメタの車体は夏休み最後の日曜日に家族旅行をするワゴン車の群れを一気に置き去りにしていった。
愛用のレイバングラスが朝日にキラリと輝いた。

ハンドルを握っているのはペンネーム『史穂里'パパ』近々文壇にデビューする予定の新人作家である。目的地は黒磯市総合運動場。全中ソフトテニス選手権の会場だった。
『史穂里'パパ』は200kmまで加速したBMWの微かな振動を感じながら一人そっと呟いた…
『まずい…。遅刻しそう…。9時には試合が始まってしまう…。』
彼は今年の東北大会を制し全国をも制覇する勢いの福島県代表のペア「古宮茉衣・伊東紗季」の応援のために黒磯へと向かっていた。

往路120kmの縦貫道を40分で走破し、約1時間で会場へと着いた。すでにコートでは試合が始まっていたが古宮たちの姿は見えない。練習コートを探すが見つからず古宮ママの携帯にダイヤルすると見慣れたママの顔が彼の前を通り過ぎた。「おっはよー」と声を掛けるとちょっと驚いたように振り向き普段どおりの愛想のいい笑顔が彼を出迎えてくれた。すぐに「古宮/伊東」もアップから戻り、「古宮/伊東」&古宮パパと朝のゴアイサツを交わす。

仕上がりは？「仕上がりはいいです…。あとは気持ちだけです…。」パパは一瞬の間を置いて、そう答えた。その一瞬の間が「勝利の女神」の悪戯で勝敗が決まってしまうことを十分に解っているパパの不安なのだろう。古宮茉衣の横顔からも本当の笑顔が見えない…。

午前10時30分。不安の中で第1試合がスタート。1回戦の相手は三重県矢渕中の仲/産屋敷。乱打を見ている限り後衛のストローク力が大差。ママの後ろから「4 - 0。悪くても4 - 1」と囁く。主審の「7ゲームマッチ。プレーボール！」の声で「古宮/伊東」の全中が始まった！

1G・2Gと引き離したいが、相手も必死に食らいついてくる。ポイントはほとんど離れずデュースの応酬が続く。普通にやれば楽勝の相手にポイントを与え、気が付けばG2 - 3の2 - 3で相手のマッチポイント。まさか1回戦で消えるのかという状況に…。土壇場の修羅場は相手後衛のストロークミスで何とか凌ぎまたしてもデュース。ここを耐えてG3 - 3のファイナルGへ。予想外の展開に『史穂里'パパ』の声も次第に大きくなる。ファイナルもP4 - 4まで一進一退。古宮のボールにはキレが戻らないが、9P目を取ってようやく逆マッチ。最後の1本は短くなった古宮のロブを相手後衛がノーバンウンドで打った球がエンドラインを大きく割ってやっとの思いで勝ち上がる。

1回戦で半数の32ペアが消えていくサバイバル戦。矢渕中はストロークに欠点があったにしても粘りはすごい。さすがに全中だ。県大会の決勝のレベルが全中の1回戦と同レベルなのだろう。

2回戦の相手を偵察に行くと古宮パパの姿がすでにあった。並んで長崎長田中と千葉県芝山中の対戦を観る。古宮パパはメモを取りながらの観戦。自分は後衛のストロークを中心にチェック。どちらが上がってきても古宮のストロークと比較すると格段の差が見える。加えてミスも多い。2G見たところで引き上げる。しかし古宮パパはじっと動かない。1回戦の反省から最後まで見るつもりなのだろう。万全の体制をつくるために…。

チームのベースへ帰る途中、堂崎先生(マガジンの中学生日記を執筆中)に会う。伊勢で史穂里を発掘してくれた恩人。丁寧に挨拶し、この全中の有力処をうかがう。堂崎氏の視点はほとんど狂わない。「第1シードの就実思ったほど伸びてない。和歌山の2年生がいい。古宮もいいがブロックがきつい」とコメント。暗に16本までと言っているように聞こえるが、ここの判断は間違えて欲しい…。

2回戦が始まる。相手は長崎県長田中。予想はG4 - 1
古宮のストロークに幾分復調の兆しが見えてきたが、まだ観客にため息をつかせるような「ドスン！」という弾道が出ない。それでも1回戦の呪縛からは解き放たれたように足は動き出してきた。
伊東もセカンドレシーブをネット際ヘツイストしたりナイスポーチでペースを作り始める。この試合は予想通りG4 - 1で勝利。次は問題の和歌山県学文路中、榎本/八幡！堂崎先生のイチオシペア。

「古宮/伊東」が練習コートで基礎練習をしている間に敵状偵察…。榎本/八幡は2回戦で鳥取県日南中の山形/小竹と対戦中。G1 - 1まで競っていたが、そこから山形のカットサーブにてこずり始める。切れのいいカットサーブはクレートをものともせずキュッと曲がる…。やっとなんてボールに前衛小竹が襲いかかり、バシッと小気味よく砂が舞う。徐々に山形ペアが引き離していく…

G1 - 4で榎本/八幡が消えた！

練習コートへ行き古宮パパに状況を伝える。選手たちには悟られないように細心の注意をしながら…。よけいな不安を掻き立てる様にはしたくない。

3回戦からは一段とレベルアップしてくる。ブロック大会の準決勝から上のレベルだろう。アップを終えた古宮茉衣が聞いてきた「前衛はかなり動きますか？」「レシーブを叩きにくる？」父親に状況は教えられたのだから見知らぬ対戦相手に必要以上の不安を持っている。「そりゃ甘いレシーブには飛びつくだろうが、しっかり返せばそう簡単には出れないよ。茉衣なら大丈夫」と励ます。だが古宮の精神状態は苛立ちを隠しきれず母親がくれたジュースにも手を出さない。15歳の女の子にとってはいまだかつて経験したことが無いような重圧が押し掛かっているのだろう…。1回戦・2回戦では緊張との戦い、3回戦以降は不安との戦い。休まる暇はない…。

3回戦スタート。サーブゲームをしっかり獲って先行し問題のレシーブゲームへ入る。後衛山形のカットサーブは相変わらず切れ味良く入ってくるが古宮はしっかりセンターへレシーブ。前衛小竹を封じ込める。加えてやっと古宮のストロークも勢いとリズムが出てくる。クロスの打合いで徐々に押し込み苦しくなって上げてきたボールを伊東が叩く。完全にノッてきている。3G連取しG3 - 0。わずか15分で日南中を粉砕。G4 - 0…。完璧になってきた。

ようやくBEST8入り。全小選手権もここまでは来ている古宮にとってやっとスタートライン。4本入りしてこそ成長の証。さて準々決勝の対戦は第1シードをファイナルで葬り去った滋賀県朝桜中の安川/濱崎。3年前の全小団体戦の覇者…。それも大将である。1シードの水松/杉本を破ったのも決してブロックではないだろう。強化・吉田氏の情報では「中学生にしては、いやらしいロブが武器」

準々決勝が始まる前に各コートを観ていると、「んっ」と思えるペアを見つける。赤のユニホームに赤い帽子…。帽子のサイドには日の丸がプリントしてあり、ツバには「JAPAN」の文字…。記憶に間違い無ければ、このパターンは全日本ジュニアだけに許されたいでたち！強化の資金が国から支出されるメンバー。対戦表で調べると岡山県就実中の弓野/佐藤だった。しかも弓野は2年生。佐藤はまだ1年生！2003'全小個人優勝も岡山倉敷ジュニアだったが、あの佐藤かな？カットサーブからの入りは日南中と同じパターンだが、こっちのサーブは桁違い。相手の動きを読み1歩目のスタートが速い。シュートボールの打合いでも途中にカットを入れてくる。後ろのブロックはこのペアで決まりと判断。決勝の相手だろう。

さて準々決勝。強化・吉田氏と並んで観戦。1ゲーム目。古宮のストロークは安定して相手コートに突き刺さっている。伊東も思うように動きポーチ・スマッシュと当たりが出ている。安川のいやらしいロブが出ないうちに3ゲーム連取。「行きそうだね」と吉田氏に言うと「いや4G目からはあのロブが必ずくる。3G取っという良かったという展開になる」との事。吉田氏の予言どおり4G目からロブがきた。前衛伊東の頭上ぎりぎりを狙ってくる。走らせられても古宮はしっかりコートに返すがコートの端から端までを走りどおしではミスも出始める。オープンコートになった所にもまたしてもロブがくる。ロブの打合いになって20本以上続いた時には「がんばり！」「しっかり」という声が飛ぶ。2ゲーム連取されG3 - 2…。「古宮監督は選手にファイナルを覚悟させておいたほうが…。」と吉田氏はまたしても不吉な予言。しかし6ゲーム目はロブがくる前に仕掛ける作戦がうまく当たりG4 - 2で勝利！銅メダル以上が確定。4本入りだ！岩代中二階堂先生から「立子山中の二階堂/三浦組以来の4本入り」と聞く。実に9年前の話である。

準決勝は埼玉県芝東中(通称シバト)の鈴木/工藤。このペアは「古宮/伊東」も何度か対戦しており、全く知らないという不安感はないが間違いなく全国トップレベルのペアではある。特に工藤の姉は、今年のインターハイの個人覇者である。しかし小宮の姉も団体戦の覇者だ。この2人は高校でも何度も戦うことになるだろう。

準決勝。ガオラのテレビ撮影の関係で応援席は狭くコートが見えない。予想通り接戦が続き流れが行ったり来たりの展開。G2 - 1で3 - 1のポイントまであったが取りきれずG2 - 2へ。鈴木の短いボールを古宮が追いかけてサイドラインの外から打ち込む。工藤がやっと返したボールが古宮と伊東の間に上がる。2人が同時にジャンプスマッシュを打ち込もうとした瞬間、空中で2人の身体が激しくぶつかる。「ドン！」とコートに落ちた。古宮が足を捻り治療の為5分間のタイムをとる。スプレーで急速冷却しテーピングしたあと試合再開。しかしこれで微妙な狂いが生じ、押され始める。序章で書いたように勝利の女神は時として悪戯をする。それがこの空中激突だった様に思える。

G2 - 4。「古宮/伊東」の全中が終わった…。

ベースに戻った2人に掛ける言葉も無い。2人ともタオルに顔を埋め声にならない声で泣きじゃくっていた。

頂上が見えていただけに無念だろう。自分の娘のことが頭をよぎる。8年前の全小(仙台青葉城コート)の決勝で石川県の竹内/丸谷にG1 - 4で敗れた時も母親の胸で泣きじゃくるのをただただ見守ることしかできなかった。男親とはそんな存在でしかないのだろうと自分に言い聞かす。強化・吉田氏が2人に「くやしいけれどおめでとうだよ」と声を掛けたとたん2人の目からは大粒の涙が堰を切ったように流れ出した。「この借りは高校で返せばいい!」と、自分も2人の手を握って伝える。

準決勝を乗り切った芝東ペアは決勝でも全日本ジュニアペアをも撃破し姉妹での頂点に登りつめた…。

【追記】

埼玉のトレーナー(工藤の父親)のホームページを後日チェックすると、準決勝の相手が1番の強敵だったと書いてあった。(当然です!!)

(注) 観戦記序章ではかなりフィクション(BMW等)もあります。ここについての誹謗中傷は却下します。観戦記については限りなく事実に基づいて記しましたがオボツカナイ記憶を頼りに書いていますので多少事実と違っていたらごめんなさいです。

著者『史穂里』父改め『史穂里』パパ。強化吉田氏の勘違いだけどこっちが気に入ったので『史穂里』パパにする。